

2) サツキ=阜／阜月

サツキはツツジ科の常緑低木で、陰暦の5月ごろに花が咲くところから、この名がついたといわれている。学名は『*Rhododendron indicum*』で、漢名は『杜鵑花』(トケンカ)である。この季節には杜鵑(ホトトギス)が盛んに鳴くため名づけられたのだろう。しかし漢名の杜鵑花は本来『*Rhododendron simsii*』(ロードデンドロン・シムシイ)を指している言葉である。またツツジの総称として杜鵑花と呼ぶことが多いことから、中国名は誤用ともいわれている。さてサツキがツツジの遅咲き種であることは前述した通りで、日本では陰暦「阜月」に咲く「躑躅」という意味で、『阜月躑躅』(サツキツツジ)とも呼んでいる。花はロート状の一重咲きが最も一般的で、江戸時代には一重咲、八重咲の他、二重咲、千重咲、牡丹咲、丁字咲、旗咲、腰蓑咲、桔梗咲、車咲、朝顔咲、猪口咲、筒咲などに区別されていた。それだけ花に変化が多いことを物語っており、この他にも花色の区別として、緋色、紅色、紫紅色、白、淡桃色、底白、無地、覆輪、絞り、さらには絞りでも微塵絞り、霰絞り、更紗絞り、大絞り、小絞り、縦絞りなど無数の変化があったことが知られている。近年では西洋ツツジなどとの交雑により、さらに多くの品種が作り出されている。

日本で最初にサツキが園芸書に登場するのは江戸時代で、歴代伊藤伊兵衛の三之丞によって記された『錦繡枕』(1692年)で、162種類のサツキが記録されている。一方、『錦繡枕』を遡ること11年、水野元勝による『花壇綱目』(1681年)では147種類のツツジが記録されている。このツツジとサツキの名称を比較してみると、重複する名が10種ほどあり、同名のものがあったのか、はたまた当事はサツキとツツジがまだ完全には分離しきれていなかったことが推測できる。しかし江戸時代という平和な時代を背景に、日本の園芸は着実に庶民のあいだに浸透し、新種の改良や開発が盛んに行われていたことは確かであろう。またサツキは盆栽にして映える木であったから、お江戸の狭い裏庭で丹精する者も多かった。葉は小さいし幹にも風格があるので、盆に乗せてじっくり見ても大樹の風格で飽きが来ない。しかも花の乏しい季節に大きめの花をいっぱいにつけて楽しませてくれる。そして有り難いことには、盆栽の中では初心者でも簡単に扱うことができる。どこからでもよく芽をふくので失敗しても、それが致命傷になることはない。陽なたに置いて毎日1回水を与えていれば、枯れることもない。このため初心者はサツキの盆栽から入るとうまく行く。こんなところからも数百年の長きにわたって、サツキがもてはやされて来たのかもしれない。しかし最近では盆栽に対する考え方の変化から、ブームは去ったようにも見える。

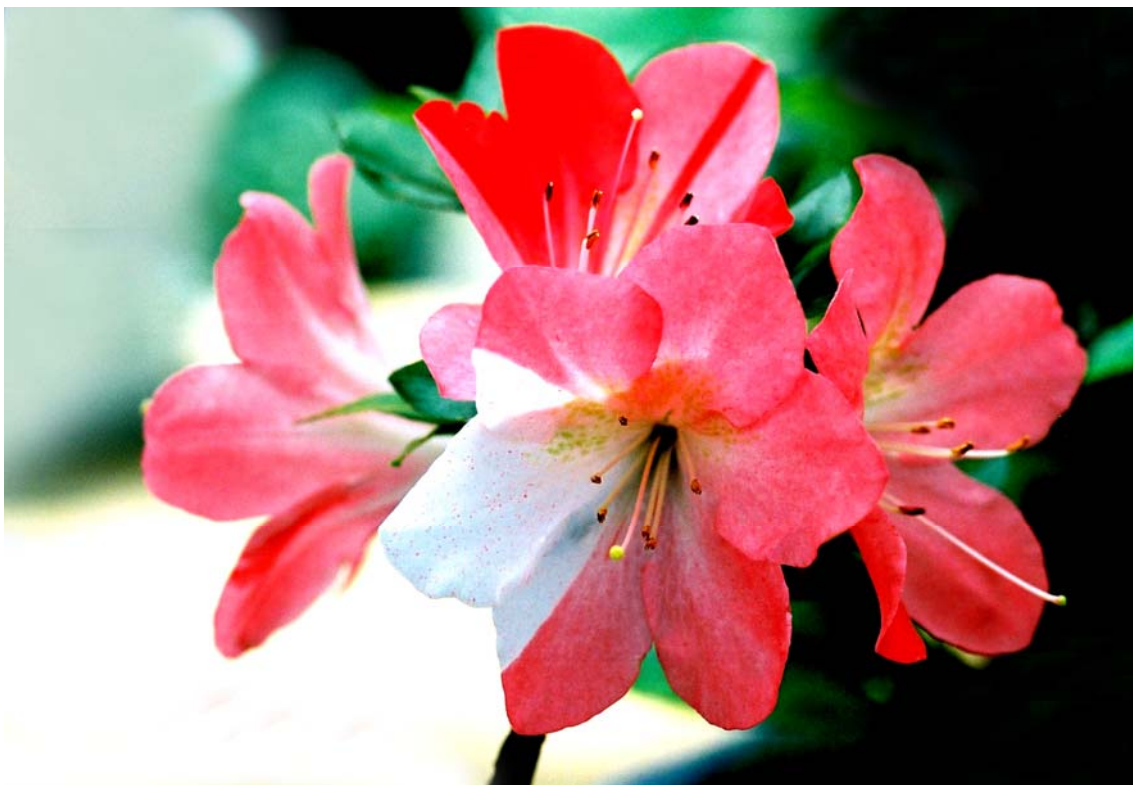
サツキは園芸店に行けば難なく手に入る。ただし品種が多いので、予定していた品種が入手できるかは難しい。以前は川口市安行がサツキの一大産地であったが、最近では住宅地化され、現在では鹿沼土の山地でもある栃木県鹿沼市から日光市などには苗木を扱っている店も多く、取り扱っている品種も多い。



「東小町」は枝変りが多く出て庭植えにも最適な品種。ツツジとサツキの境界線はきわめてあいまいで、サツキの方が花期が1ヶ月ほど遅いが、枝代わりを多く出す特徴がある。



サツキ：晃貴



サツキ：煌陽。サツキの愛好家は極めて多く、その品種もまた多い。しかし最近ではこの人気も下降線を続けており、昔の優良品種が安値で売られている。



サツキ：品種名不詳



サツキ：君子？その理由は筆者の想像だが、ツツジは植えっぱなしでいいのに対して、サツキは鉢に入れて、形を整えたり水やりを欠かせなかったり手がかかるからであろう。



サツキ：聖代？しかしサツキも路地植えなら植えっぱなしにしても差し支えない。 [目次に戻る](#)